

日本文学にみる医療思潮の歴史的変遷

——疾病観の多重構造——

大 星 光 史

諸 言

医学、医療行為は人間を対象にしたものである。とりわけ、近代医学は心身を対象にして、個人の置かれた社会的環境、健康観・疾病観を無視しがちである。しかし筆者がこれまで行なってきた経験、すなわち精神科領域の患者に対する詩歌の指導をとおして、実感するに至ったことは、医療を全うするには社会的環境、個々人の健康観・疾病観を無視できないということであつた。⁽¹⁾⁽²⁾

一方、現代の様な複雑な社会では、人それぞれの持つ健康観や疾病観は必ずしも同一ではなく、また、先端的な医学研究によって明らかにされた学問的合理性が全ての国民に受け入れられているわけではない。西洋に発した現代医学は、明治以降、日本に定着し、われわれが行なっている医学は欧米の医学と何ら異なるところがないと思つてきた。だが、近年、医学のめざましい発展によって新たな問題に直面したとき、例えば、臓器移植の問題一つをとつてみても、欧米諸国と我が国民の医療並びに身体に対する認識には微妙なズレがあることが判明した。その結果、現代の先端医療を実施することへの不安が、国民の間に生じ、医学の将来に対する期待感に欧米との違いが出てきている。

いまや医学が進歩して、さまざまな難疾患の治療ができる可能性がでてきた。しかし、かつてのように、治療できることはすべてやればよいという事態でなくなっている。生殖医学のように倫理的立場から治療の可能性はあっても、治療すべきでないことが出てきている。また、臓器移植のように、法的に認められても、普及しない医療もある。日本に生まれたために、国内では実施出来ないことは、患者にとってきわめて不幸なことである。こうした事態をただ自然に解決することを待っているのが現状である。

いまや日本人に特有な国民性があるのか、あるとすれば、それは何かということをあらゆる面から検討する必要性が生じている。

また我々の祖先達は健康や疾病をどのように捕らえてきたのであろうか。すでに服部敏良や立川昭二らによる歴史資料を使った先行研究もいくつかある。しかし、文学作品を体系的な調査した研究はこれまでになかった。文学作品はそれぞれの時代の生活を語り、人情を語る。文学を調べることがもつとも有効な手段の一つである。また、文学からそれぞれの時代の思想・主義・宗教・政治・風俗習慣等を具体的に理解することができる。

これまでの医学史的研究業績は医書や本草書にもつづいた学問の発達史が主流であり、医療の現場でもつとも重要な患者の心理、意識には眼を向けた研究は少なかった。この問題についてすでに拙著『文学に見る日本の医薬史』（雄渾社）で、文学的ならびに歴史的視点から国民性について検討した。

本稿では文学作品に現れた各時代の医療思潮の特色に焦点をあてて、時の流れによって変遷するさまを明らかにした。そのことは、現在のわれわれ日本人の疾病観の根底に共通する構造を明らかにすることを目的に為されたものである。同時に江戸時代の医師に焦点を絞って、医師と患者の相互の意識を調査して、現代日本の医師患者関係における深層心理の原点はいかなるものかを求めた。

I、方 法

調査の対象としたのは、古事記・日本書紀をはじめとする主たる歴史書、日本古典文学・辞典・随筆・宗教書・風俗書である。こうした資料から医事・医療にかかわる文章を抜き出し、先行研究⁽³⁾⁽⁴⁾を参考にしながら、検討を加えた。底本に使用した文献は、書誌学的に定評のあるものを用いた。それらについては、便宜上、表1にまとめた。なお、日本医学史に関する参考文献も巻末にまとめて付した。

II、考察と結果

1、古事記・日本書紀にみる医療と疾病観

〈医療と政治〉 日本に医療の歴史は『日本書紀』と『古事記』にはじまる。無論、このことは傍系の歴史だと認められていた文献もあるが、それはここでは触れない(大星光史『文学に見る日本の医薬史』)。「日本書紀」の神代上の第八段一書第六に、「夫大己貴命与少彦名命、戮力一心、経営天下、復為顕見蒼生及畜産、則定其療病之方」とある。⁽⁵⁾すなわち、大己貴命は大国主命であり、少彦名命と力を合わせ、心を一にして、人々や家畜の為に病気を治す方法を定めたということであるが、これについては新村が、共同体首長の職能のひとつに病氣への対応があつたことを示唆していることを指摘している(新村拓『古代医療官人制の研究』二頁、一九八三年、法政大学出版社)。

このように古代においては、現代以上に医療と政治が不可分であった形跡を示している。このことは中国の伝説的人物、三皇五帝の時代の伏羲、神農、黄帝の説話に通ずる。伏羲は火の利用の発見と易の基礎の作成、神農は農業と薬草の利用、黄帝は医学の理論と鍼灸の術を大成したが、このことは中国の文学・歴史学その他で常識化されている。⁽⁶⁾すなわち、世界的にみても、古代においては医療行為は、政治家の重要な仕事の一つであり、その施政の量の半ばをしめる

表
1

- 1、諸橋轍次・大漢和辞典(全十二巻及び索引)、大修館、東京、一九八七
- 2、巴稜宣祐・西洋医学史、山雅房、東京、一九四一
- 3、大塚敬節・東洋医学史、山雅房、東京、一九四一
- 4、大平健・竹沢静夫編・精神医学と文化人類学、金剛出版、東京、一九八八
- 5、石田秀実・中国医学思想史(東洋叢書・七)、東京大学出版会、東京、一九九二
- 6、小川鼎三・医学の歴史、中央公論社、東京、一九六四
- 7、長浜善夫・東洋医学概説、創元社、大阪、一九六一
- 8、服部敏良・奈良・平安・鎌倉・室町・江戸時代医学史の研究、吉川弘文館、東京、一九九五
- 9、日本臨床心理学会編・心理治療を問う、現代書館、東京、一九八五
- 10、大槻如電原著・(佐藤榮七増訂)・日本洋学編年史、錦正社、東京、一九六五
- 11、清水藤太郎・日本薬学史、南山堂、東京、一九四九
- 12、富士川游・日本医学史、形成社、東京、一九七四
- 13、井上清恒・医学史ものがたり(全三巻)、内田老鶴圃、東京、一九九一
- 14、古事類苑三十巻並びに総目録・索引、吉川弘文館、東京、一九七八
- 15、日本古典文学大系(全百巻並びに索引)、岩波書店、東京、一九七六
- 16、日本古典文学全集(全五十一巻)、小学館、東京、一九八八
- 17、東洋文庫(全二八二巻)、平凡社、東京、一九七六
- 18、新村 拓・日本医療社会史の研究、法政大学出版局、東京、一九八五
- 19、安西安周・日本儒医研究、青史社、東京、一九八一
- 20、大星光史・文学に見る日本の医薬史、雄渾社、東京、一九七七

ものであったことが知られる。

医薬は、古代にかぎらず、現代人にも重大関心事であるが、とりわけ古代では、民を治めるために欠かせぬ事柄であったこと、またそれが政策の最重要部分を占めていたことを示唆するものであったと言える。

〈幽と疾病思想〉 さらに注目すべき点は大國主命は少彦名命と協力して国造り、医療活動を行なった後、少彦名命は粟莖に登って常世国に弾かれ去ったとの記述がある。これは異國、とくに永遠の国あるいは幽の国を想定していたといえる。靈魂不滅の思想である。なお、少彦名命が身体が異常に矮小であったこと、少彦名命は戎であるという説については、拙著(九頁)で論じているので、ここでは省略する。

病むことについて、本居宣長は次のように記している。「すべて生きて此世にある間の事にして、頭にこれを見聞し得べきものはこれを顕事といひ、幽眇にして見難きものを幽事といふ。人が死したる後に、その靈魂は幽冥に帰し、ここにその作用をあらはすものであるが、幽眇にして見る事が出来ぬから、顕事に対してこれを幽事といふ。それは顕はには目にも見えず、誰が為すともなく、神の為したまふ業である。人はさらなり、天も地もみな神の靈によりて成れるものであるから、天地の間なる古事も凶事も、すべて神の意なり、現人の頭に行ふことの外に幽事(神事)あり、顕はに目にも見えず、誰が為すともなく、神の為し給ふ業なり」と、幽も顕も神の意であるという。

日本の文献上、最初に出てくる病による死の記事は『古事記』のイザナミの神がヒノカグツチノカミを生んだときである。この出産のために、イザナミは亡くなり、幽の世界に入る。『古事記』には、疾病は神の意によって起こるものであり、いずれの神であつてもこちらから犯したことに對して祟りとして疾病がもたらされることを記している。⁽⁸⁾ それはもののけ思想につながっていく。もののけは『源氏物語』の夕顔の巻で有名になるが、生靈の祟りである。はじめ神意を犯してたことの祟りとして顕れた病気が、人にも神靈と同じようなものを認めて、病を靈の祟りであるとみるようになった。このような疾病観は現代の日本人の心の奥底に根強く流れている。それは初詣や、折々には様々な機会をとら

えて、神事を営むことがまだ生活習慣の中に色濃く残っていることから明らかである。

〈疾病の治療法〉 疾病が神意によって起こると信じた。その結果、治療法としては神の祟りや怒りを鎮める祈禱などが重要な手段として広く行なわれた。⁹⁾ 江戸時代の人、伴信友は「病を癒す薬食も、いひもて行けば病を禁厭除らしむる術ながら、その術を行ふをくするといひ、其術によりて食ふ薬を久須利といへるなり」(拙著、一八頁)と記す。医薬を用いることが禁厭を行なうことに通じ、薬物療法を含めた治療法であるという認識があった。

さらに、ヤマタノオロチを退治するとき酒が用いられたが、薬として様々な酒がもちいられたとも言われている。¹⁰⁾ 中国の医書『黄帝内経・素問』¹¹⁾の酒を薬物として用いる記述との一致を見る。

この他の治療法として温泉の効用が記されている。『伊予国風土記』¹²⁾に、仮死状態になったスクナヒコナノミコトを何とか蘇生させようとして、オオナモチノミコト(大国主神)が、大分の速見(別府温泉)の湯を地下の水道から引いてきてスクナヒコナノミコトに湯浴みさせたところ、忽ち生き返って、元氣そのものの足で地面を力いれて踏むまでになったという。原文は「凡湯之貴奇、不神世時耳、於今世、染疹痾万生、為除病存身要薬也」とある。つまり、温泉が貴く奇しき湯であり、神の世からその当時に至るまでの要薬であると認識されていたのである。

同じ『伊予国風土記』の項に、この温泉(神の井)を見て、「世の妙しき験を欺きたまひき(欺世妙験)」、また「沐神井而廖疹」¹³⁾と記されている。温泉もまた神からの賜物であり、神の井として認識されていたことが推察される。

2、上代文学(五三八〜七九三年)に見る医療思潮

〈こころとことば〉 『古事記』(七二二年)、『日本書紀』¹⁵⁾(七二〇年)、『風土記』¹⁶⁾(七二三〜七三三年)、そして『万葉集』¹⁷⁾(七五九年)を歴観すると、その作品群によってこの時代特有な精神風景が見えてくる。医療との関連でいうならば、「こころ」の作用、その精神の有り方によって、病気ともなり、病気を癒し得るといふ思潮が明らかとなる時代である。

いわゆる「善き」ところが行為の最優先なものとされてきた時代といえる。心のやさしさは疾病という範疇を越えて、人生の幸不幸を支配し、さらには神々の世界にも通ずるものと捕らえられるようになった。すなわち、心の世界が全事象をも支配するとの考え方が生じていた。

医療の記述では『古事記』で大国主神が因幡の白兔を救った例が最初と思われる。兄である八十神達の「海水を浴びたらよい」という非情な治療法に対し、大国主神が傷ついた身を真水で洗い、蒲の粉を貼布することによって癒えるとした。心のやさしさは同時に治療法、痛みのない和やかな治療法に通じていた。

『万葉集』には「ことば」の持つ力も「こころ」の具現化として神へのメッセージであったことを推測させる事例がある。

天智天皇の病が重くなった時に、皇后が詠まれた歌「天の原振り放け見れば大君の御寿は長く天足らしたり」(万葉集、一四七)⁽¹⁹⁾は、現実には天皇は生死の境にあつたが、皇后は「大空をはるか振り仰いで見ると、大君のお命はとこしえに長く空に満ち溢れている」と詠まれたのである。天皇はその後間もなく崩じられた。しかし、皇后は「御寿は長く天足らしたり」と断定気味に言うことによつて、「満ち満ちた天子の生命」を想い描き、言霊による挽回、実体を招来しようとする。

また、人々は病死あるいは不慮の死の後、命の行き先、落ち着く場所をいくつか想定していた。たとえば「家離りいます我妹を留めかね山隠しつれ心どもなし」(万葉集、四七二)「留めえぬ命にあればきたへの家ゆは出でて雲隠りにき」(万葉集、四六一)「青旗の木幡の上を通ふとは目には見れどもただに逢はぬかも」(万葉集、一四八)のように、死に行く人はその魂を山に天に運んだ。靈魂の不滅を強く信じていたのであつた。それゆえの肉体を凌駕する精神力の逞しさだつたとも察せられる。

〈養生法〉 古代人にも健康の維持や長寿を願う当然の欲求があつた。それで祈禱に頼るばかりでなく、薬草や食物の

効用など現実に効果あるものが探索された。

『古事記』に次のような逸話が記されている。⁽²⁰⁾ 伊邪那岐命、伊邪那美命の男女神によって国生み、神生みが行なわれたが、女神は火の神のお産をしたとき、そのために命を失われた。なお、これは分婉による死を語った最初の例である。男神は、女神が去ったことを悲しみ、女神の居る死の国を訪ねた。女神の嫌がるのを強いて抑え、奥に進んで死の国の魔性の者らに追われる。男神は逃げながら「桃」を投げ、魔性から逃れている。『日本書紀』では、魔性へ投げつけたものに、筍(たけのこ)、葡萄、蔓草があった。⁽²¹⁾ これらの植物はいずれも生命力が強く、邪気を除く果実、植物としての観念があったものか。死とか病むとか醜に対して、勢い盛んな植物が対比され、その生命力は人体や人間の精神作用にも影響を及ぼすとの考えがあったものようである。蔓草は頭に巻いて装飾とした。後の「カザシ」や「ウズ」がそれに類するが、植物の持つ旺盛な活力を、身体とくに頭髮を通じて取り入れようとする意図が窺える。

食養生に対する考え方は、古今東西古くからある。日本では大伴家持の「瘦せたる人を嗤笑ふ歌二首」は巷間によく知られている。

石麻呂に我物申す夏瘦せに良しといふものぞ鰻捕り喫せ(万葉集、三八五三)

瘦す瘦すも生けらばあらむをはたやはた鰻を捕ると川に流るな(万葉集、三八五四)

石麻呂という老人のいくら食べても身体が痩せて見えるのをからかった戯れの歌である。原本の「武奈伎」は「倭名抄」⁽²²⁾に「無奈岐今俗呼奈岐」とあり、現在でも土用鰻が夏瘦によいといわれる。

『風土記』の播磨国賀古郡の条に、愛する人の遺骸を運ぶ際、つむじ風で印南川(現加古川)で失い、匣と褶のみが残った。悲しんだ天皇(景行)は、毎年その川の「年魚」を食料として献上されていたものの、以後「この川物を食わない」という。しかし、病気になる時、「葉はや」と求め、賀古の松原に宮を遷されたとある。しかも、ここからは素晴らしい清水も湧き出したとある。⁽²⁴⁾ 療養に適する閑静で風光明媚な地ときれいな飲料に適した水、そして、「年魚」が薬として

効を持つていると当時は考えられていた形跡がある。

戯奴がため我が手もすまに春の野に抜ける茅花ぞ召して肥えませ（万葉集、一四六〇）

我が君に戯奴は恋ふらし賜りたる茅花を食めどいや瘦せに瘦す（万葉集、一四六二）

紀女郎が「あなたのために手も休めることなく一生懸命春の野で抜いておいたつばなですよ。食べておふとりなさい」といえば、「わが君にわたしは恋しているらしい。いただいたつばなを食べたものの、瘦せるばかりです」と家持は答える。茅花は千本科植物で葉は稲のように薄く、高さ三、四尺で叢生する。春に新芽を出す時には葉の中に花を包み、細い筍を思わせるものがある。

上代文学を振り返ると、そこには素朴な形での人間の心のやさしさ、自然の植物、太陽その他の有している活力、偉大さ、または人間が所有する言葉、精神力の威力、これに何よりも注目し、そのすばらしさが肉体、身体の疾患を癒し、根治するものがあると固く信じていたと思われる。同時にこれを自然に湧き出す温泉、水、また新鮮な自然そのものともいえる魚や野草の中に健康の源泉を求めようとする試みがなされていたことが示唆される。

3、中古文学（七九四～一一九一年）

平安時代であるこの時代には、王朝文学をはじめとして文学の面では、時代を超えて、たくさん傑作が残されたが、医学史の面においても、中国から直接、あるいは朝鮮を経て日本にもたらされた中国医学が、日本にようやく定着してきた時代である。なお、この時代になると、朝廷の医官らが医書を書いたが、現存するものは、『医心方』（九八四年）⁽²⁵⁾など限られ、『医心方』以前のものはほとんど逸失して、現代に伝わらない。そのために、平安時代の医療がどのように展開したかについては不明なところが多い。しかし、豊富な文学史料から見ることで、補うことができる。

へものけ・悪霊・鬼神〉この時代になると、人生の不幸や疾病の原因として悪霊や鬼神の存在を信じて、加持祈禱

などが医療の主流を為すようになった。この背景には仏教、とくに密教や、修験道、陰陽道など道教的な文化の流入があったものと考えられる。

『医心方』の中には道教思想の影響を受けたとおもわれる「三尸」(さんし)⁽²⁶⁾説が記されている。これが当時の疾病観の形成に大きな影響を与えたものと推測される。

「三尸」とは人の体に住んだ小さな三匹の虫の存在であり、これが宿主の人間の所行を北極星に報告するために、人間はその寿命を削られるという思想である。『今昔物語』にはこの思想を受けて、「病、人ノ形ト成リ、医師其ノ言ヲ聞キキテ病ヲ治セルコト」が記されている。⁽²⁷⁾この説話の中には二人の童子が登場し、病人の体の中に潜んでいる。これを除くには八毒丸をはじめとする様々な薬物が用いられたが、彼らの畏れるのは名医であり、高德の僧や修験者であった。ここでは病気という内部の鬼、病魔との戦いの有り様が端的に示されている。

平安朝時代と言われたこの時期は、女流文学の時代であり、同時に和歌、日記文学、それに説話文学の盛んな時代でもあるが、これらの作品をとおして、上述の「三尸」説とその類縁の思想が、庶民や貴族階級に広く浸透していたことが伺われる。『例を『源氏物語』に見てみたい。

若き光源氏は、愛する女性夕顔を連れ、夜の別荘を訪れる。ここで夕顔が、かつて光源氏が愛した六条御息所の生霊にとり殺されるという事件が起こった。光源氏が寝入りかけた時、その枕上にひどく美しい女が立ち「わたしが愛しているにもかかわらず、お訪ねもなく、このような人をお連れし寵愛なさっていること、わたしはとてつらいことです」といって、夕顔を抱き起こそうとする、夢ではと目醒めれば、魔物(鬼・物怪)に襲われるかのごとき感がし、灯も消えていた。灯をつけてみればすでに夕顔は息も絶え絶えである。あわてて供を起こしに行き、鳴弦をさせ、戻ってくる、夢の中で枕上に立った女が幻となって見えてふっと消えた。そのとき夕顔はすでに息きれていた。

葵の巻では光源氏の正妻である葵の上の車と六条御息所の車が御禊の日に車争いとなり、葵の上の供人に六条御息所

は深く傷つけられる。葵の上はその後「御物の怪めきて、いたう、わづらひ」になられ、妊娠の上にこうしたものが加わるので加持祈禱を多く行なわせた。「物の怪、生霊などいふもの、多く出で来て」その正体が分かってくるものの、一ただけ特別なものがある。執念深く、ぴったりと葵の上についたままである。これが六条御息所の生霊である。結局、葵は出産の上、この物怪に憑かれ急死する。

この六条御息所の怨霊は、死後も光源氏の愛人に次々と祟る。紫の上が胸を病み、衰弱もひどく、余命も永くはあるまいと思われたのが数々の修法の効によって「日頃更に現れぬ物の怪、小さき童にうつりて呼ぶ匍ふ程に漸々生き出で」(若菜)とある。しかし、この物怪が髪をふり立てて泣くさまは、かつて光源氏が見た六条御息所の怨霊とそっくりであることにびびくりする。⁽²⁹⁾この怨霊はさらに女三の宮に祟る。⁽³⁰⁾物怪は次のように告げる。「わが執念が成功して女三の宮を尼にすることができた。源氏の君が、自分の祟りからうまく紫の上を取り戻し、その命を取り返したとお思いいなっているのが、自分にはつくづく残念でもあり、嫉妬も感じるので、今度はこの女三の宮に取り憑き、何気ない風をしているが、今や女三の宮が出家したからには用もなくなった帰りましょう」と物怪が乗り移っていた寄りましの童が手を打って笑い狂ったと述べている。驚くべき執念である。母六条御息所の異常なまでの執念深さを悲しむ娘の秋好中宮は、出家志願を申し出る。これは光源氏の諫言で追善供養を厚く行なうことで止められるが、どうやらこうした人の死後の魂は、地獄に落ち、業火の中にのたうち廻り、その罪障の軽くない状態が物怪となって現れ出るとの表現が、「亡き人の、御ありさまの、つみかるからぬさまに、ほの聞くことの侍りしを」(鈴蟲)⁽³¹⁾に書き出されている。

こうした「物怪」は、人間の、それも人並み以上に美しく、一般庶民から見ればとても恵まれた境遇の高貴な女性、その女性の魂、主に男女間の嫉妬、あるいは深い恨みを中心となつて時に生霊となり、死後も死霊となつて取りつき崇る。その執念の程を源氏物語は限りなく語っている。

《加持祈禱》 お産への加持祈禱の例も多い。藤原道長の長女彰子中宮はお産のために七月十六日夜から実家である道

長の邸宅、土御門殿に里帰りをしている。池の岸辺の樹々、遣水の汀の草むら、夕映の美しい庭園の秋色漂う光景。邸内ではそうした優雅な景色を彩るのかごとく「不断の御読経」の声々が聞こえ、一層しみじみとした秋の風情を感じさせる。³²⁾『紫式部日記』の初めは、こうした描写から始まる。間断のない読経は、一昼夜を十二時に約十二人の僧が輪番で『大般若経』『最勝王経』『法華経』等を読誦しつづける。他でもない中宮の安産祈願のためである。紫式部の仕えた一條天皇の中宮彰子は時に二十一歳。加持祈禱はこれのみでない。「観音院の僧正、ひむがしの対より、二十人の伴僧をひきみて、御加持まゐりたまふ足音、渡殿の橋の、とどろとどろと踏み鳴らさるるさへぞ」と、観音院の僧正、法住寺の座主、浄土寺の僧都と、各寺の高僧をそれぞれ一宗一派にこだわることなく招いていることが分る。こうした邸内の僧はもとよりのこと、諸国の山々、寺々を尋ね求め、修験僧という修験僧、陰陽師の全てを召し集めたところ。その熱意もさることながら、当時の藤原道長の権勢、財力の大きさも分る。同時にこうした精神界、加持祈禱の類がお産のための唯一の卓効と信じられていた時代性にも不思議な感を覚える。

このような場合、修験僧は何をするのかといえば、中宮についている「物怪」どもをよりましといった別の人間に移し代え調伏しようとし、大声を上げ祈りたてる。お産に何故このような加持祈禱が行なわれたかといえば、それが当時の病魔退散の、または精神安定の唯一の方法であったからとしか言いようがない。この『日記』の出だしの秋の気配の土御門の邸宅、庭園と、荘厳な絶え間ない読経に作者自身が詩的な陶醉を感じ、心の安定、清らかさを感じていることが良く描かれているが、こうした情景は、妊婦である中宮に宗教的安定感を同様に与えるものがあつたと思われる。このように加持祈禱は上は天子から下は一般庶民にいたるまで行なわれている。彼らはそれによって心の安定感を得ており、事実、それによって病氣も平癒したようである。文学的諸作品には治病の際の医師の登場は殆どみられない。この加持祈禱が医療の主役であつたとの感が否めない。

このような疾病感はこの時代の特色であるが、これに現代人も共感できる。またこの傾向を現代においても形を変え

た内容で継続している。病気における精神的な不安の安定を求めて、宗教、呪術的なものに頼らざるを得ない一つの流れはいまも続いているとの感を深くする。

4、中世文学（一一九二～一六〇二年）

鎌倉・室町・安土・桃山といった時代の特色は何であったか、いわゆる武士中心の時代であり、それだけに前時代の貴人・貴族文化から転じて鎌倉時代はむしろ簡素で実用を重んじていた。衣服においても、庶民も婦人も活動的な服装となった。結髪の風習となり、前代のような烏帽子その他の冠物を必ずしも用いないでよく、女性も以前の頭髮の長さや競う習慣から脱した。住居も平安時代の冬寒く夏暑い、採光通風不十分な湿気の多い暗い建築様式から、実用的質素な方向へと転ずる。機能的であり、その日常のスポーツ、遊びも、戦鬪を念頭においた身体の錬磨と活動的で活発なものが多い。結婚年齢もこの時代は男子十五歳、女子十三歳とその基準が上昇している、妊娠・出産・早婚の弊害がかなり防がれることとなった。

この頃の文学作品の特徴は和歌に加えて軍記物の登場である。一方、親鸞・道元・日蓮をはじめ多くの宗教家の活躍が思想家の変革を行なった時代でもある。そして室町時代には謡曲・能が勃興した。

〈諦観・合理主義〉 前時代末の戦乱をきっかけに『方丈記』³³の鴨長明も語るその天変地異から生ずる飢餓・疾病の現象、こうした不安な人の命の無情な有様を見るにつけ、人々はその救いの場を強く宗教に求めて行つたと考えられる。

無常観は一面では人間をきわめてクールなむしろ宗教から乖離する冷徹な眼を持たせる作用もあつた。虚無的な享樂的な人生観、一方でひたすら神仏にすぎる姿、風雅の世界に遊び、第三者の眼で何事も眺めて見てゆこうとする態度。

ここでそうした代表者の一人、『徒然草』³⁴の兼好法師の作品を取り上げてみたい。人間の生き方、人生を説き、かの『徒然草』で著明な兼好は、ともすれば思想家であり、文学者・出家僧の一人かと取られがちである。事実その面も否定で

きないが、なかなかの合理主義者でかつ現実的、とくに医・薬に関しては深い興味を寄せる人物の一人であった。

彼の「友とするにわるき者、七つ」と「よき友三つ」の中で、悪いものとして、位の高い人、若い人、無病で身体が強い人、酒好きの人、勇猛な武士、嘘を吐く人、欲の深い人を上げ、良い友として、第一には物をくれる友、第二に医師、第三に知恵のある友を挙げている。この「三つ」の第一は経済・生活。第二は身体・健康。第三は知識・教養・理性とも取れる。彼が第二番目に医師を友人に選びたいと願っているのは面白い。生活にゆとりがあつて、病気がなくて、風雅・知的生活を楽しむ兼好の理想であり、きわめて現実的な理屈で割り切れる内容である。彼が「病なく身強き人」「猛く勇める兵」あるいは「酒を好む人」を嫌つたのは、弱者、病人の身心の理解に乏しく、ともすれば、こうした強い人のペースにはまっつて自らを傷つけ、ついつい無理をしてしまうのではないか。これは「若き人」の場合にも言える。こうした点を考えると作者は意外と病弱であり、それだけに健康には注意を怠らぬものが多々あつたのではないかと考えられる。同時に「高くやんごとなき人」にも警戒心を抱いているところを見ると、こうした人との交際、友人関係が精神的にも香ばしからぬものがあり、精神衛生上、ひいては健康上良くないとの判断を体験的に下していたとも取れる。

こうした見方でいくと、彼の医・薬への関心は単なる机上の、またエッセイとしての論ではなく、自らの身心のさまざまな反応・条件を観察した上での結論として「よき友」「わるき友」の選択であつたと思われる。彼は第二百二十二段の中で、「人の才能は、文あきらかにして、聖の教を知れるを第一とす。次には手書く事、むねとする事はなくとも、是を習ふべし。学問に便りあらんためなり。次に医術を習ふべし。身を養ひ、人を助け、忠孝のつとめも、医にあらざるべからず。次に、弓射、馬に乗る事、六芸に出せり。必ずこれをうかがふべし。文・武・医の道、誠に、欠けてはあるべからず。」と記し、経書などを通じて聖人の教えを知ること、次に学問のために字が書けること、そして次に医術を習うのがよいという。わが身の養生のためにも、人を助け、忠孝にいそしむにしても医術が果す役割はその根元に位するという。

彼は精神と肉体の両面から自己や人間の姿をみようとした。とかく当時の精神主義、ともすれば身体や健康そのものの重要性を忘れがちな時代にあつて珍しい存在ともいえる。全て肉体と健康が基礎にあつて目的は達成され、人助けもできるのだとの考えはむしろ現代的でさえある。

また彼は「唐の物は、薬の外は、なくとも事欠くまじ」(第百二十段とも言っている。困難な中国からの航路を無用な物をいっぱい運んでくる愚かさ。遠国からのものは宝としない、または手に入れがたい財貨は尊ばないでありたいもの。これが兼好の趣旨である。しかし、こうした遠い中国からの物でも、薬だけはなんとかして手に入れたいと願う。薬に関しては例外だった。陰陽師の有宗入道が鎌倉から京へ上り尋ねて来、開口一番「この邸の庭は広いにもかかわらず面が多い。細道一本だけを残して他は畠とし、何かを植えるべきである」と忠告したのに作者はひどく共鳴している。「誠に、少しの地をもいたづらに置かんことは、益なき事なり。食ふ物・薬種など植ゑおくべし。」(百二十四段)と、兼好はこの時代を象徴するような人物である。出家しており、思想家であり、歌人であり、文学者である。中世の全ゆる要素・特徴を身につけていたともいえる。

彼を一例として見ることによって中世の教養人、広くは人々全般の医薬・医療への当時の認識、その雰囲気をも知ることが出来る。彼は健康をとでも大切にしたい。したがって医薬・治療法への関心は非常に深かった。しかも、その行動、ものの考え方の中には物事にとらわれない合理性、客観的な見方が強く支配している。その彼にしてやはり「心」の問題はゆるがせにはできなかった。それゆえの出家であり、仏道選択だったと取れる面が多い。彼は心の安寧を考えぬいた末、信仰に辿りつかざるを得なかったものと思える。時代性のしからしむるところがあった。それにして何事も冷静に距離を置いて眺め、世のあらゆることを知り抜いたかに思われる兼好が、その結論を、健全な身体と、心のゆたかさ、平穏な生活にその評価の基準を置いていたのは注目すべき内容である。

《陰陽道》 当時は陰陽道も未だ滅び去っておらず、また、この世は幻との考え方もあった。⁽³⁵⁾ 陰陽道での一例を上げる

と、安倍晴明というすぐれた陰陽師が居る。ある日、みるからに風雅な美しい若者に出会った。しかしその若者の上を鳥が飛んできて糞をしかけた。このことによつて彼は若者が呪詛されていることを知る。見れば今夜一夜の命である。それでも彼に会つたことが幸いでもあつた。事情を話して、夜通しの加持祈禱をしてやつた。明け方、呪詛を依頼されていた或る陰陽師が術の敗北で死んだとの報告がある。実はこの若者のライバルの妬みによる仕業であつた。「妬がりて、陰陽師を誣らひて、式をふせたりけるなり。さてその少将の死なんとしけるを、晴明が見つけて、夜一夜祈りたりければ」(巻第二の八)と、その生も死も、病氣とは全く無縁な異次元で運用されてゆく。

この中世という時代は、迷信、盲目的なものより第三者的、冷静な立場を保持しようとする姿勢が見られる。相次ぐ戦乱や社会的変革、下剋上のなものが深くその生活、人生観にも及んでいたと思える。人の生のはかなさ、運命の流転、これらは彼らの心をとらえ、この世は夢幻、頼るべき神仏にも一抹の不安を抱かせるものがあり、それでいて、それゆえにといつてもよいかもしれぬが一層の信仰心、宗教、精神的に依るべきものを求める傾向も生んでいたものと考えられる。迷信と神仏への帰依は、健康、治病にやはり欠かせぬものとして捕えられていたが、一方、兼好のように冷徹な精神世界、健康観、治病への眼もあつたことは否めない。医薬、医師の存在がようやく教養人、さらには一般庶民にも知悉され、また、養生・健康のあり方が「物怪」「陰陽道」的なものから脱却し、世に広められていく時代的、過渡期的な動きがあつたと考えられる。

〈仏教的無常観〉 中世の後期になると文学作品に無常観が現れる。室町時代の『閑吟集』⁽³⁷⁾という小歌集には、この世は夢、幻、瞬時に過ぎ去るものとの人生観を読みとることができる。あるいは思想といつた方がよいかもしれぬ。

「世間はちろりに過ぐるちろりちろり」(四九)

世の中はまたたく間に過ぎて行くという。「ちろりちろり」との言葉の内に、そのはかなさが感じ取れてくる。

「何ともなやなう何ともなやなう浮世は風波の一葉よ」(五〇)

「何ともなやなう何ともなやなう人生七十古来稀なり」(五一)

浮世は荒い波風に揉まれる一葉の船のようなものとする仏教的無常觀が流れ、なんとも致し方のない空しさ、人の命の短かさが漂う。

「ただ何事もかごとくも夢幻や水の泡笹の葉に置く露の間にあぢきな世や」(五二)

「夢幻や南無三宝」(五三)

「燻む人は見られ見られぬ夢の夢の世を現がほして」(五四)

何もかも夢幻であり、水の泡、笹の葉に置く露、だからまじめくさった人なんかみられたものでない。夢の夢の夢のように実にはかない世の中にあつて、なんでもまあ謹厳実直、とりすました顔をしてるんだろうと。この世はまさに夢であると観ずる思想。これが中世文芸の中心をなすものでもあつた。

「何せうぞ 燻んで 一期は夢よ ただ狂へ」(五五)

隆達の小歌をはじめ類歌の多い、よく知られた代表的ともいえる中世思想を象徴する小歌でもある。生命・人生を直視し、救われざる宗教・呪術的な迷妄から少々虚無的であるが背離してゆく傾向を読みとる事が出来る。

5、近世文学 (一六〇三〜一六八七)

江戸時代といえば、かなり身近な存在感を覚える。すでに中世の末のころより、西洋医学が南蛮医学としてキリスト教の伝導師を通じて入ってきている。江戸時代の中期以後、長崎から伝わったオランダ医学がいわゆる蘭学とよばれて普及し、その後は日本の新しい医学への黎明を告げるようになる。

〈呪術からの離脱・儒教精神〉 江戸初期の頃から、庶民の間では加持祈禱という「心」を中心とした治療方法から、医師の存在が強く意識され出す。しかし、逆にこうした医師の存在は、文学に登場した限りではあまりよく評価されて

いない。『仮名草子』の当時の医師自身の作品であるといわれる『竹斎』³⁸等にそれがよく描かれる。また、儒者伊東仁斎は『儒医之弁』の中で「医師自身が医術そのものを小道でありとして、世間から巫げき賤工の類と同一視されることを恥と考え、ひそかに儒学を勉強したと称し、自分では儒者であり、国を治める大道を知っている者だといってわが名を高からしめ、このことにより医師としての名をあげ、結果的には医の利を貪ろうとする輩、こうした儒医のやり方は卑陋である」と儒者を上位に置き、医の業を下に置いている。同時に儒者が医を行なえば大道たる儒を失い、逆に医が儒を行なえば、小道たる医も失う。小人たる医師は分相応の医だけを行なってこそ意義があるとして医術だけを修めるべきだといっている。儒者が医を行なうことも非難されている。当時は儒学すなわち人倫・道徳を説き且つ研究する純粋な学問が真の価値を有するもので、医術はその下に位するものとの認識があった。肉体以前に精神が優先するとの考え方にも通じる。ともすると物質的な豊かさだけを追及する現代の風潮を見ると、この儒医の思想にも学ぶべきものがあるように思われる。

しかし、儒者の中にはその学問的思想を実践するものとして医学を取り込む人材が輩出した。この間の詳細は安西安周の『日本儒医研究』³⁹に記されているところである。

しかし、いつの世にも理想は形骸化する傾向があり、儒学者を名乗る者の中には、表向きは学問に専念しているが、生計のために医師の仕事も副業として兼ねていた者もいたようである。⁴⁰ 儒学修得を門に掲げ、実は医の利益につなげようとした風潮も一方ではあったと察せられる。

しかし、江戸時代は伝統・権威・精神性や現実の否定によって逆に第三者的な醒めた眼で物を見るクールさ、客観的、科学的な存在価値を認める時代的要請が生じてくる。実証的な医術の価値が認められ、医師という職業が民間に広くもはやされるようになった時代ともいえる。医師の存在は大きく、経済的にも社会的にもその地位を確固たるものにしたつあつたと考えられる。また、人々の生命をあずかる貴重な任務を負っているだけに庶民にとってはやや煙たい、近

寄り難いそれでいて親しみが湧いてくる存在でもある。その力を揶揄し、医師の価値をあえて引き下げようとした試みさえ見られた。

〈医師への評価〉 当時の医師・医薬をどのように庶民が見ていたものか、その一端を川柳によって探ってみた。^(註)

(イ) 外科殿の豚は死に身で飼はれて居

(ロ) 木葉屋丁稚ぐらいは内で盛り

(ハ) 薬取やつびし犬に手をもらひ

(ニ) 代脈が来たて今坂引込ませ

(ホ) 医者と隣つて常不断起される

(ヘ) 医者結句うどんで引かぶり

(ト) 瘡毒に衣を着せよ長居中

(チ) 唐本は籠へ乗時ばかり入れ

(リ) 仲人にかけては至極名医也

(イ) は当時すでに動物を用いての実験が行なわれていたことを窺わせ、(ト)の梅毒等は措置の仕様がなく、長屋仲間あるいは近隣同士で患者の世話をし、挙句は旅に出して、その難を防いでいる。患者が行く先々の人々こそいい迷惑であったが。

(ホ)は医師の隣家は夜中でもドンドンと戸を叩き、医師を迎える音に目を覚まされ、オチオチ安眠もできないと嘆く。(ハ)の句などでは医師に対してはかなり熾烈な諷刺、戯画を試みている。繁盛ふりを示すために薬取りに行っても待たせてなかなか当の薬を呉れない。(チ)では世間態を気にしてよく読めもしない(あるいは全く読めない)漢字で書かれた難解な医書を駕籠に乗る時だけは手にして見せる。(リ)は仲人はうまいが当の医術の専門の方はからきし駄目という。

いざ風邪でも引くと、自分の薬は用いないで、(効かないことが常日頃分かっているゆえ)熱いうどんを食べてふとんを引つかぶって寝ると(へ)。(ロ)の薬局商売の場合、丁稚が病気になっても医師にみせることなく、内で薬を調合してすます。

しかし当時の人々が病気や、医師と全く無縁であったかといえ、むしろその関係は時代を追う毎に多かつたと思える。それゆえの医師をテーマとしての川柳、諷刺の数々であった。その分、医師は極めて身近な庶民生活を共にした職種であつたといえる。事実この川柳関係で調べた範囲だけでも五十数句がある⁽¹²⁾。現代の医師になるための国家試験などは存在せず、薬のあつかいに習熟し、その知識があれば医師の仕事に入った者も多かつたかと思われる。「俄医者三丁目にて見た男」などといった句もある。それでいて身分の上下をはつきりさせる部分もあつて(二)のような句も生ずる。川柳に見る医薬に対しての庶民感覚といえる。

医師はそれ相当の収入があり、大名・武士を除いた庶民社会では僧侶と共に敬われる存在であつた。それだけにこの二者はよく川柳に登場させられる。

『近世畸人伝』⁽¹³⁾という書があり、ここに庶民の例から見た理想的医師像が記されている。全体を通じて医薬に関係する人物は十七名程度登場するが、まとめてみると、先ず医師としての実力技倆を充分持ち合わせていること。権門勢家に出入りせず、金銭にきわめて淡泊であつたこと。貧しい人には無料で奉仕し、そうした人々にもあえて高価な薬の使用を惜しまない。人間的にはとても魅力に富む人物で、趣味も豊富。医術以外のことでは失敗も多く、対世間的には実に世渡りの下手な愛すべき好人物である。また、自己主張が少なく自然を愛し、人を愛する。果敢でいて反面その弱点も多い。性格的には明るく人間味があり、努力家でもある。打算がなく、奇異・奇行のエピソードも多い。人間的やさしさがあり、庶民の味方であり、それでいて人間的もろさ、隙の多い人物でもある。以上が十七名の医療関係者・医師の要約した内容である。

要するに医を天職としながらも、ゆたかな愛と人情に生きた逸話の多い人物。これらを丹念に記載している。

同じことは『近世畸人伝』とは異なるが平田篤胤⁽⁴⁴⁾や貝原益軒⁽⁴⁵⁾の養生法、白隠の『夜船閑話』⁽⁴⁶⁾その他にもいえる。大儒・佐藤一斎⁽⁴⁷⁾の養生の要を掲げておいてみたい。

若くして林家の塾長に抜擢された佐藤一斎は、江戸の人で、安永元年(二七七二)江戸浜町的美濃(岐阜県)岩村藩の藩邸に生まれた。中井竹山に朱子学を学んだが、彼の沢山の著書の中でも『言志録』『言志後録』『言志晩録』『言志耄録』からなる『言志四録』は一斎四十二歳より随時書かれ、最後の『耄録』は八十歳から二年弱で完成されたものである。因みに「耄」の字は「耄」と同じく「老いる」の意味である。彼のこうした『言志録』は、とくによく知られ、この中に修養、身心の養生に関する内容もまた多い。安政六年(一八五九)に八十八歳で没した。

彼は先ず「人は須らく地道を守るべし。地道は敬に在り。順にして天の承くるのみ。」と、天地を敬い、そこに順応することを説く。⁽⁴⁸⁾ つづいて「地をして能く天に承けしむる者は、天之を申しむるなり。身をして能く心に順はしむる者は、心之を申しむるなり。一なり。」のように身体は天地そして更には「心」によって順応し、健全さを保ち得るものとする。⁽⁴⁹⁾ 彼は養生を身体に限らず、とくに精神の安定、悩み不安からの脱却を重視した。⁽⁵⁰⁾ そして、早寝早起⁽⁵¹⁾、飲食物、ときには一飲一食も薬として食することが大切として具体的な生姜・なつめ等の内容を上げたりする。⁽⁵²⁾ こうした点では具体的な記述も多い。さらに「安」⁽⁵³⁾「節度」⁽⁵⁴⁾を重んじ、「喜ばしく」⁽⁵⁵⁾あることを大切にすする面では、精神的なものを「養生」の第一とした。十分に現代に通じ、むしろ現代が見失っているもの、学ぶべき内容も加味されている。

江戸時代を通して見た時、医学の興隆は目覚ましいものがあり、これは読み書きの修得、文学作品が庶民一般に普及したことに深く関連していたと思われる。儒学者をはじめ、多少学問や文学に接し得る機会・境遇にある者は、その気さえあれば経済的に恵まれる可能性を秘めている医を副業乃至は専業とした。民間療法、漢方のあり方も彼らを通じて研究され、世に広められていった傾向も考えられる。⁽⁵⁶⁾

同時にこの時代は長崎の出島を通じ、わずかな範囲内であるがオランダ・中国との交易があり、とくに蘭学は大きな比重を占め、次の世代である明治の西洋医学につながる要因を持ち、多くの人材を輩出した。⁽⁵⁷⁾ 古代から奈良・平安時代にかけては、宗教家・僧が医を兼ねていた面も多かったが、この時代もキリスト教宣教師による伝導活動に付随する医療関係の例も多い。⁽⁵⁹⁾ 信仰による治療、治癒による例や日本の僧侶、神官による治病の部分も存在していたことは時代の庶民感覚を特色づける川柳等によってもおよその推察がつく。⁽⁶⁰⁾ しかし、精神的、信仰によつて病を癒すといった考え方は薄れ、医師による治療、治癒の施術が大きな信頼を勝ち得る時代へと入つていた。その意味では現代へつながる目覚めた見方が庶民の心を支配していたと考えられる。

江戸時代の人々は時代的にもきわめて現実的であり、鎖国政策で儒教道徳を中心の封建社会であつたにもかかわらず、和歌を除き文学ではそれ相応の江戸文化の華を開くものがあつた。これは医学への関心の点にもいえるのではないだろうか。民間医療、伝統的医学の研究、そしてこうしたものを通じての養生の法などは、貝原益軒、佐藤一斎、白隠、平田篤胤等によつて述べられていることは先にも触れた点である。病気になる前の予防法、すなわち飲食その他、日常生活での起居さまざまな分野を考慮しての健体・保養の論を述べ、⁽⁶¹⁾ とくに宗教的・迷信的なものから脱却したかたちでの精神力・心の持ちようの大切さを説いたことは注目すべき点がある。健康体を保つ工夫や養生の説は今日でも学ぶべき部分があると考える。

結論と総括

文学をとおして我々日本人の生命観・疾病観を辿つてみると、現代に生きる我々の中に、多重構造を為して、様々な形で過去の思想が脈々と息づいていることが明らかとなつた。

仏教の影響を受ける以前の自然信仰は「靈魂の不滅」を示唆しており、「こころ」の在り方が健康を維持し、神意に沿

うことが寿命を全うすると捕らえられている。新年にご来光を拝み、一年の無事を祈念するのは、この思想が今日に息づく一例である。また、「ことば」の持つ霊的な力を信じることも、今日全く廃れてはいない。新たに誕生した子供に親は精魂込めて命名するのである。これが第一の構造である。

新村拓⁶²はこの時代の病因論を・①神への反抗・離反、②呪咀、③禁忌に侵犯、④為政者の不徳、陰陽の不順、⑤事故、⑥邪神・悪霊、そして⑦荒振神と分類しているが、筆者と基本的に同一の見解である。①③⑥⑦は神そのものであり、②は「ことば」の霊力、④も神意に沿わぬ結果である。⑤の事故などは偶発的な要素が大きいが、新村⁶²によれば、古代の人々は、それとても神の意に沿わなかった自分にもたらされた不幸であると認識していたという。

仏教や修験道、あるいは陰陽道が伝来した後に盛んとなった「物の怪」「祟り」あるいは「呪咀」の存在を信じる心も我々の日常に息づいている。結婚式や吉事は大安の日を選び、葬式は友引の日には行なわない。入院患者が大安の日を選んで退院したいと申し出る事も少なくない。また、仏閣の大香炉の煙を熱心に体に浴びる善男善女の姿を我々は日常的に見る事が出来る。この「物の怪」や「祟り」の存在を信じる心が第二の構造を形成している。

浄土宗、浄土真宗、日蓮宗などの鎌倉信仰仏教は宗教を庶民のものとしたが、その基本には加持祈禱などによる悪霊の排除を否定し、現世利益は信仰の後に付いてくる副次的なものであるとした。また広く流布した阿弥陀信仰には現世に対する「諦観」があり、また来世への憧れがある。この思潮は江戸文化へと受け継がれて行つた。この諦観は我国の高度成長期には薄らいでいたかに思えるが、近年、再び勃興の気配がある。オウム真理教などへ多数の若者が引き込まれた背景にはこのような諦観も一つの力として作用したように思われる。これが第三の構造である。

江戸期の政治体制の維持に利用された儒教思想も大きな底流を形成している。この思想は第二次世界大戦の終焉まで、我々日本人の教育理念の根幹を形成していたのであるから、その影響は多大である。数年前『清貧の思想』⁶³という書物がベストセラーになったが、これは儒教思想と仏教的諦観を取りまとめたものと理解できる。これが第四の構造である。

そして第五の構造と呼ぶべきものは、本論では触れなかったが、科学万能主義とも呼べる合理思想である。これは江戸期の蘭学の勃興をその端緒とするが、明治期の文明開化を経て、第二次世界大戦後に主流となった思潮である。

金融ビックバンを契機として、今、我国のみならず世界が大きな価値観の変更を迫られている。既存の体制や価値観にのみ捕らわれていたのでは来世紀の医学・医療の新たな展開は計れない。この時にあって、我々の中にある生命観・疾病観を見直してみることは今後の方向を探る上で意義あることである。そのことの善悪は今問わないが、本論文によって為された我々日本人の心の多重構造を全く荒唐無稽なものとして捨て去るのではなく、この現実を踏まえたところ

文献

- (1) 山下委希子、大星光史…「句歌の会」活性化の試み―俳句をつくる過程の段階的教示の効果―精神科治療学、一九九八
- (2) 野原 茂、湯浅 悟、湯浅ゆき子、松井三枝、葛野洋一、麻生光男、岡部彰人、上原隆、倉知正佳、大星光史…俳句からみた患者心理の継時的変化―進行性核上性麻痺患者の1例―第一二八回北陸精神神経学会、一九九四、五、金沢
- (3) 小川鼎三…医学の歴史、中央公論社、東京、一九六四
- (4) 富士川游…富士川游著作集、思文閣出版、京都、一九八〇
- (5) 日本古典文学大系…日本書紀上、岩波書店、一九六八、一一九頁
- (6) 宇野哲人…中国思想、講談社(学術文庫)、東京、一九七〇、二九〇―三〇三頁
- (7) 富士川游…富士川游著作集、思文閣出版、京都、一九八〇、六九頁
- (8) 日本古典文学大系…日本書紀(上)、岩波書店、東京、一九七六、九二―九五頁、九八―一〇二頁
- (9) 同右(下)の三四八―三四九頁
- (10) 日本古典文学全集…古事記、小学館全、東京、八一―八四頁
- (10) 日本古典文学大系…日本書紀(上)、岩波書店、東京、一九七六、二四二―二四三頁

- (10) 同右…(上)、三五〇～三五二頁
- (11) 日本古典文学大系…風土記、岩波書店、東京…一九七六、四六六～四六九頁
- (12) 小曾戸丈夫、浜田善利…意訳黄帝内経素問、築地書館、一九七一、六二頁
- (13) 日本古典文学大系…風土記、岩波書店、東京、一九七六、四九三～四九五頁
- (14) 同右…四九五～四九六頁
- (15) 日本古典文学全集(全五一卷)…小学館全、東京、一九八八
- (16) (17) 日本古典文学大系(全百巻並びに索引)…岩波書店、東京、一九七六
- (18) 日本古典文学全集…古事記、小学館全、東京、一九八八、九二～九五頁
- (19) 日本古典文学大系…万葉集、岩波書店、東京、一九七六、『万葉集』の歌の通し番号：一四七
- (20) 日本古典文学全集…古事記、小学館全、東京、六四～六八頁
- (21) 日本古典文学大系…日本書紀(上)、岩波書店、東京、一九七六、九二～九三頁
- (22) 源順…和名類聚抄(辞書、承平年間(九三一～九三八)成立
- (23) (24) 日本古典文学大系…風土記、岩波書店、東京、一九七六、二六三～二六四頁
- (25) 丹波康頼…医心方、三十巻三十冊、永観二年(九八四)
- (26) 『医心方』巻二十六「去三尺方第八」(『河図紀命符』からの抄録)
- (27) 日本古典文学大系…今昔物語、岩波書店、東京、一九七六、一五二頁
- (28) 日本古典文学大系…源氏物語、岩波書店、東京、一九七六
- (29) 同右…葵の巻、三一七～三三九頁
- (30) 同右…若葉の巻(上)(下)、二二一～四一八頁
- (31) 同右…鈴虫の巻、八九頁
- (32) 日本古典文学大系…紫式部日記、岩波書店、東京、一九七六、四四三～五〇九頁
- (33) 日本古典文学大系…方丈記、岩波書店、東京、一九七六

- (34) 日本古典文学大系・徒然草、岩波書店、東京、一九七六
- (35) 大星光史・文学に見る日本の医薬史、雄渾社、東京、一九九七、二三七～二四三頁、二五一～二五二頁
- (36) 日本古典文学大系・今昔物語、岩波書店、東京、一九七六
- (37) 日本古典文学大系・閑吟集、岩波書店、東京、一九七六
- (38) 日本古典文学大系・仮名草子、岩波書店、東京、一九七六
- (39) 安西安周・日本儒医研究(復刻版)、青史社、東京、一九八一
- (40) 日本古文学大辞典・本居宣長、平田篤胤、岩波書店、第六卷、一二～一五頁、第五卷、二〇七頁
- (41) 日本古文学大系・川柳集、岩波書店、東京、一九七六
- (42) 日本古文学全集・誹風柳多留及び誹風柳多留拾遺、小学館、東京、一九八八
- (43) 東洋文庫・近世崎人伝・続崎人伝、平凡社、東京、一九七六
- (44) 大星光史・文学に見る日本の医薬史、雄渾社、東京、一九九七、二九一～二九三頁
- (45) 同右・二七三～二七六頁
- (46) 荒井荒雄・夜船閑話、大蔵出版、一九六六、四二～四四頁
- (47) 佐藤一斎(久須本文雄全訳校注)・言志四録(上)(下)、講談社、東京、一九七〇
- (48) 同右・(上)、四九頁
- (49) 同右・(上)、七一頁
- (50) 同右・(上)、二二二頁
- (51) 同右・(下)、二二八頁
- (52) 同右・(下)、二二三頁、二二五頁
- (53) 同右・(下)、四六四頁
- (54) 同右・(下)、二二四頁
- (55) 同右・(下)、四六八頁

- (56) 大星光史…文学に見る日本の医薬史、雄渾社、東京、一九九七、四四三～四七二頁
- (57) 同右…三七二～三九一頁
- (58) 同右…六〇～六二頁、一〇五～一〇八頁
- (59) 同右…三七二～三七七頁
- (60) 東洋文庫…耳袋、平凡社、東京、一九七六
- (61) 大星光史…文学に見る日本の医薬史、雄渾社、東京、一九九七、二七三～二九三頁
- (62) 新村拓…日本医療社会史の研究、法政大学出版局、東京、一九八五
- (63) 中野孝次…清貧の思想、草思社、東京、一九九二

A Historical Review on the Recognition of Well-being and Diseases in Japanese Literature : Its Multiplex Construction

by Mitsubumi ŌHOSHI

In 1997 the Japanese government enacted a law concerning organ transplantation offered by brain-dead patients. However, there were no cases of transplantation carried out according to this law during this one year. This might be partly explained by the psychological background of the recognition of well-being, disease or death among Japanese citizens. This investigation was performed in an attempt to reveal the psychological background of matter among Japanese citizens as shown in Japanese literature from ancient to modern times. The result showed that a multiplex construction exists in the recognition of well-being, disease or death which is partly inherited by modern Japanese citizens. (1) Pre-Buddhist era : people believed that soul and spirit were immortal, and also believed in the miraculous power of language. (2) Old-Buddhist era : people believed in the power of an evil spirit or imprecation, and incantation and prayers were very common procedures to avoid such ill omens. (3) New-Buddhist era : people felt themselves drawn toward yearning for the world of Buddha, and believed in the future existence. (4) Confucianism and Buddhism era : people worshiped God and Buddha, and accepted any trouble as misfortune. (5) Modern science era : people recognize the value of rationality.